

1. 研究の背景と目的

「いただきさん」は香川県高松市で見られる、鮮魚を取り扱う女性行商人の総称である。彼女らは漁師の夫が採捕した魚や仲買より購入した鮮魚を「横付け」（写真 1）と呼ばれる特殊な自転車に積載し、行商を行っている。

水産物行商では産地の近くに消費地があり、漁港から背後にかけて活動を展開した。このような産地型行商は全国で見られたものであったが、流通の発達や店舗の拡充により営業数を減らしていった。産地型行商には民俗学による研究蓄積が多々あり、「いただきさん」に関する研究も民俗学的視点から行われ、道具や行動の一部が収集されたが、行商の地域的展開や行商行動の様式などが不明である。

そこで、本研究では「いただきさん」の、実態を把握し、考察を進めることで行商の地域的展開を検討し、得られた地域的展開から、空間行動という視点から行商を捉え、その行動様式を明らかにする。また、「いただきさん」が客とのつきあいで、どのような関係にあるのか検討することで、現代における意義を問うことを目的とする。



写真 1. 横付け

2. 調査地概要と研究方法

香川県高松市は四国地方の北東部に位置する香川県の中央に位置し、人口は 41 万人、瀬戸内海式気候に属している。

本研究では香川県高松市を中心に活動する「いただきさん」とその客を対象にした。

調査方法は現地に延べ 1 か月滞在し、「いただきさん」の行商に密着することにより、「いただきさん」と客のやり取りを記録し、彼女らの相互交流に注目すると共に、「いただきさん」並びにその客に聞き取り調査を行った。

3. 調査結果

「いただきさん」の営業数は最盛期の昭和 30 年代には 400 人以上を数えたが、香川県魚介類行商に関する条例に基づく登録によると、現在では 46 人まで減少している。廃業の主な理由は高齢による体力の衰え並びに脛を悪くしたためという理由が多く聞かれたが、交通事故による心的外傷という例も聞かれた。しかし、姑や姉などの「横付け」を受け継ぎ、新規就業する例もある。

高松市内では多くの「いただきさん」が行商を営んでいるが、彼女らは基本的に人通りの多い道に沿って分布しており、かつ食料品店や百貨店、スーパーの近くに存在していた。このことを加味して、行商分布図と周辺地区の世帯数を重ねると、「いただきさん」が行商を行う場所の背後は多くの世帯を抱えていることが明らかになった。

また、「いただきさん」の中には移動せず同じ場所に立ち続ける人が多数存在した。移動しない彼女らの行商に注目した結果、平均来客数は 32 名、平均売上額は約 30000 円であった。また、常連のそれ

ぞれの家庭状況を把握し、情報を販促に利用するだけでなく、客への気遣いとして還元していた。

4. 考察

産地型行商である「いただきさん」は他の産地型行商が衰退する中で、数々の要因が重なり、現在まで行商を存続させることができた。

1 つ目は、香川県魚介類行商条例や後に全面改正され、制定された香川県魚介類行商に関する条例が鮮魚行商に有利な条例であったことである。近隣の愛媛県や岡山県では路上で刃物を使用する行商は、条例により禁止されており、京都府では冷蔵車でなければ鮮魚行商を行うことができない。しかし、香川県の条例では、「食の安全を守りながらも伝統を残していきたい」という思惑から、路上で刃物を使った行商が禁止されることはなく、今日まで行商を行うことができた。

2 つ目は高松市の地理と地理的変遷である。市内が平坦な地形であるため、行商が容易であり、かつて市電が運行されていたことから、広い道路用地が確保され、歩道も広く、路上で行商を容易に営むことができた。また、気候では雨が少なく日照時間が長いこと、気候が温暖なことは、行商にかかる肉体的負担が少ない。

3 つ目が、高松市での漁業形態である。高松市における漁業は小型底びき網という、多種少量の漁獲が主になる漁法が中心であり、行商に適した漁法であったことである。

このような条件を利用し、「いただきさん」らは時代に対応した、運搬手段を選択し、行商を営み続けた。彼女らは、近過ぎる行商は客を取り合うことを熟知し、客も「いただきさん」を選んだため、背後に世帯数の多い地域を持つように、つの字に分布した。顧客らが、高松市郊外から市内中心部に向かう導線上で「いただきさん」らは行商を行い、人の群れが通る道に網をひいたかのように「いただきさん」らは分布している。また、新規就業者が、居住地から遠方で行商を営むことができるようになったのは運搬手段である「横付け」の影響が大きい。

こうして、行商を営んできた「いただきさん」は人々の導線を意識し、家々を訪問する移動型行商から導線上に展開する定点型行商に移行した。

この移行により、同じ場所同じ時間にいること、商品知識の豊富さや顧客の細やかな要望に応え続けたことから、顧客との相互の信頼を構築するに至った。

このような行商の継続は、「いただきさん」らを漁業の文化的機能で生まれた副産物から、地域漁業を支える存在に変化させ、魚食文化を支えることにより、漁業の文化的側面に貢献することとなった。

このように、「いただきさん」は市井に漕ぎ出した舟として、地域を見守りつつも、地域漁業の存続や漁業の文化的側面に貢献しているのである。

5. 参考文献

神埼宣武『峠をこえた魚』、福音館書店、1985年

瀬川清子『販女——女性と商業』、三國書房、1943年

中村周作『行商研究——移動就業行動の地理学』、海青社、2009年

日野秀哉『「いただきさん」の民族誌—港町高松における鮮魚行商人』、関西学院大学社会学部、2011年